



西洋社会は日本をどう見てきたか。——と云うことについての画期的な本が昨年出た。題して『欧州における日本』という。カピツ博士編、大判二巻、各巻およそ千ページ、別巻として完備した索引がある。

編者の友人の日本文学研究者 Dr. Barbara Yoshida-Kraft の好意により、私はこの素晴らしい本を昨年の暮れから座右において、折にふれ拾い読みして今日に到った。興味津々として

類はかりでなく、——鎖国にも拘らず日本人と接触し、日本に滞在した少数の欧州人はあつた——、小説や劇のなかでの日本への言及までも含まれている。その資料の一部は、すでに知られているが、ほとんど知られていない、編者の発見といふべきものもある。

欧州での基本的な情報源となつた資料ばかりでなく、多数の又聞例である。紋切りの型は一面の事実の誇張であり、異文化の叙述を讀者に与てわかり易くすると同時に、他方では多面的な現実の理解を妨げる。その型はたとえば一七五四年の五年にパリで出版された無署名の小説『ハンゴの王シヴァン』、日本の王子教育の物語『Civan, roi de Bungo: histoire japonaise ou tableau de l'éducation d'un prince』(本書第二巻、四六九頁)にあらわれる日本の風俗の描

例である。紋切りの型は一面の事実の誇張であり、異文化の叙述を讀者に与てわかり易くすると同時に、他方では多面的な現実の理解を妨げる。その型はたとえば一七五四年の五年にパリで出版された無署名の小説『ハンゴの王シヴァン』、日本の王子教育の物語『Civan, roi de Bungo: histoire japonaise ou tableau de l'éducation d'un prince』(本書第二巻、四六九頁)にあらわれる日本の風俗の描

た日本の自然および社会についての情報が、その量においても、正確においても、整理のし方の合理的体系性においても、全く庄倒的であつたことは、周知の通りである。今ここに贅言(せいげん)しない。この資料集成はシーボルト以前十九世紀初を下限とするが、私はケンペルやシーボルトの仕事に、当時の、それは十九世紀まで続くと思われるが、知的欧州の底力、——広い視野、確固とした方法、異文化との出会いにおいても発揮されるおとくべき分析

純化するだろう。現に、私がこの文章を書いているとき、中東では米国の爆撃機が数万トンの爆弾を地上にふりそそいでいる。その地上では何が破壊されるだろうか。第一に、あらゆる物的設備と人命。また第二に、複雑な現実に関する真実の情報である。戦争の当事者にとっては、味方でない者は敵であり、敵の敵は味方であつて、それこそは現実の極端な単純化にはかならない。また戦争の当事者は、宣伝により大衆を操作する。どちらの側にとつても、戦争は常に「聖戦」であり、「正義のいっせ」であり、「平和のための努力」である。しかも宣伝をする者は、みずから発明した宣伝文句を多かれ少なかれ信じるようになり、したがつて現実から限りなく離れてゆくだろう。『欧州における日本』のなかでの欧州人たちは、日本との戦争の最中に日本について語つたのではなかつた。(評論家)

# 夕陽妄語

加藤周一



写において、あきらかである。

しかし今日まで生きのびているのは、紋切りの型ばかりではない。鋭い観察と意見が、今なお日本社会を論ずる要点として継承されていることもある。たとえばウイリアム・アダムス(三浦

按針)は、一六二三年の友人宛書簡のなかで、早くも日本人の宗教に対する態度として多くの「宗派 sects」のなかから一つを選び、その宗派にも祈る神仏習合的特徴を指摘していた(本書第一巻、三六五頁)。またたとえば十八世紀末に、フランス人神父、ピエール・クロード・ル・シユヌア(Pierre-Claude Le

Jeune)は、その著書『日本と日本人の批判的哲学的觀察』(Observations critiques et philosophiques sur le Japon et sur les Japonais, Amsterdam/Paris, 1780、本書二巻、六八六頁)は、一七八二年刊のその独訳を載せる)のなかで、日本人の勤勉(能率の良さを指摘)、さらに彼らが「あらゆる仕事において完璧(かんぺき)を追究すること」に注意している。また英国と日本とを比較しながら、英国は

「抽象的科学」に優れ、日本にはそれがなく、しかし思考の相対的自由は日本にもあるから、もし彼らが「抽象的科学」の価値を理解すれば、あらゆる学問領域で日本は成功するかもしれないというところも、強調していたのである(本書二巻、六八五頁)。今からみて「あらゆる学問領域」は、もちろん、誇張である。しかし現代の日本の工業的成功の背景に、「仕事における完璧さの追求」と、「抽象的科学の価値の理解」との、強い結びつきを考えると、はじめてなる。

また鎖国の日本を訪れた欧州人のなかには、十八世紀初にケンペル(Engelbert Kaempfer)があり、十九世紀初のシーボルト(P. F. B. von Siebold)があつた。両者が欧州にもたらした

と総合の能力——を感ぜざるをえない。欧州の文化が彼らを作つたのである。

しかし十七世紀と十八世紀に限つていえば、——殊に産業革命以前十七世紀においては、日本と欧州との間の、物質的な生活程度や行政的な技術や倫理的秩序に、大きな差はなかつた。多くの欧州人が、彼ら自身の社会へつらつて、日本に欠けているのはキリスト教だけだとさえ考えたほどである。布教の問題はあつたが、征服の具体的な問題はまたなかつた。較差が開き、植民地帝国主義が全世界の征服へ向かつて動き出したのは、十九世紀初になってからである。征服者は征服の対象を「戦争の当事者はその相手を、極度に単

マルコ・ポーロは中国事情を欧州へ知らせたが、日本については又聞きのみ。十六世紀に日本を訪れたポルトガル・スペインの宣教師たちは、この未知の国の社会と文化について詳細な報告を、ヴァティカンへ送つた。その主要な部分は欧州でよく知られていたばかりでなく、今では彼らの仕事の一部が日本でも広く読まれている。たとえば『日葡辞書』や『日本史』(ルイス・フロイス)など。

しかし十七・八世紀、キリシタン弾圧以後の鎖国時代に、欧州で刊行された日本に係る文献・地図・挿絵の総合的な集大成は、『欧州における日本』が初めてである。そこには直接の見聞・研究の類はかりでなく、——鎖国にも拘らず日本人と接触し、日本に滞在した少数の欧州人はあつた——、小説や劇のなかでの日本への言及までも含まれている。その資料の一部は、すでに知られているが、ほとんど知られていない、編者の発見といふべきものもある。

欧州での基本的な情報源となつた資料ばかりでなく、多数の又聞例である。紋切りの型は一面の事実の誇張であり、異文化の叙述を讀者に与てわかり易くすると同時に、他方では多面的な現実の理解を妨げる。その型はたとえば一七五四年の五年にパリで出版された無署名の小説『ハンゴの王シヴァン』、日本の王子教育の物語『Civan, roi de Bungo: histoire japonaise ou tableau de l'éducation d'un prince』(本書第二巻、四六九頁)にあらわれる日本の風俗の描

た日本の自然および社会についての情報が、その量においても、正確においても、整理のし方の合理的体系性においても、全く庄倒的であつたことは、周知の通りである。今ここに贅言(せいげん)しない。この資料集成はシーボルト以前十九世紀初を下限とするが、私はケンペルやシーボルトの仕事に、当時の、それは十九世紀まで続くと思われるが、知的欧州の底力、——広い視野、確固とした方法、異文化との出会いにおいても発揮されるおとくべき分析

純化するだろう。現に、私がこの文章を書いているとき、中東では米国の爆撃機が数万トンの爆弾を地上にふりそそいでいる。その地上では何が破壊されるだろうか。第一に、あらゆる物的設備と人命。また第二に、複雑な現実に関する真実の情報である。戦争の当事者にとっては、味方でない者は敵であり、敵の敵は味方であつて、それこそは現実の極端な単純化にはかならない。また戦争の当事者は、宣伝により大衆を操作する。どちらの側にとつても、戦争は常に「聖戦」であり、「正義のいっせ」であり、「平和のための努力」である。しかも宣伝をする者は、みずから発明した宣伝文句を多かれ少なかれ信じるようになり、したがつて現実から限りなく離れてゆくだろう。『欧州における日本』のなかでの欧州人たちは、日本との戦争の最中に日本について語つたのではなかつた。(評論家)

『欧州における日本』の原題は次の通り。  
Japan in Europa:  
Texte und Bilddokumente zur europaischen Japankenntnis von  
Marco Polo bis  
Wilhelm von Humboldt, hrsg. von Peter  
Kapitza, Iudicium  
Verlag,